

「けがを防ごう ―けがの宣言―」（第5学年）

（1）育成したい「思考力」と思考に必要な要素

【単元で育成したい「思考力」】

健康で安全な生活を送るため、交通事故や身の回りで起こるけがの原因をとらえ、防止するための具体的な手だてを、人の行動とまわりの環境の両面から見出していく力

知識

けがの原因には、人の行動とまわりの環境があり、その両面がかかわっていることを知っている。

本単元では、交通事故や身の回りの生活の危険等を取り上げ、けがの原因と防止する方法についてとらえることが大切である。そのためには、けがが起こる原因を理解し、周囲の危険に早く気づき、正しい判断で安全に行動することや、まわりの環境を整えること等その防止策を具体的に見出していくことが必要である。

その「思考力」を支える要素として上記のような「知識」が必要である。それは、交通事故やけがの発生要因としては、人の「行動」とまわりの「環境」があり、それらは、どちらか一方だけが原因となることは少なく、多くの場合、それらの両面がかかわっているためである。しかし、子どもたちの多くは、人の行動の不注意に目が向きやすく、まわりの環境も影響していることに気付いていないことがある。それは、これまで「走らない」「注意しよう」等、けがの防止のために身の回りの大人から、安全な行動をとるように注意をされているためであると考えられる。

そのような子どもたちは、事故やけがの原因を人の行動の面からのみとらえてしまう傾向が強いため、防止策を考えたとしても、「走らないようにする」「気を付ける」という安全な行動を意識することにとどまってしまうことが予想される。実際は、「走る」という人の行動と、「廊下が狭いこと」「グラウンドに凹凸があること」等のまわりの環境の両者が密接にかかわり、けがが発生することをとらえなければならないと考える。

そこで、上記の要素に働きかけることにより、交通事故や身の回りで起こるけがの原因を正しくとらえることができ、けがを防止するために必要な視点を子どもたちにもたせることにつながると考えたのである。

（2）想定される個の様相

けがで保健室に来室した子どもたちに、その原因を尋ねると、「走っていて転んだ」「走っていて人とぶつかった」等と自分の行動をまず第一に答え、その場の状況やまわりの様子等、環境にかかわったものを原因に答えることは少ない。

さらに、けがをした時の原因やその場の様子について問う実態調査を行ったところ、A児は、その原因を「不注意」と答え、その時のまわりの様子は何も答えていなかった。また、B児は原因を「よそ見」と答えており、A児と同様にその時のまわりの様子は答えられておらず、よそ見をしていたという自分の行動が原因ととらえていることが伺えた。どちらの子どもも、人の行動に原因があることには気付いているが、まわりの様子には目が向いていないと考えられる。

このような様相から、本時でも、子どもたちは自分の行動にのみとらわれ、まわりの環境に目が向きにくいことが想定される。

(3) ユニバーサルデザインの働きかけ

① 思考に必要な要素への働きかけ

注意散漫で、人の話を最後まで聞いていられなかったり聞き間違いをしたりする、ワーキングメモリーが小さくて、聞くそばから忘れてしまう、耳から入力した情報をうまく統合できないなどの問題があるAD/HDの子どもがいます。これらの子どもたちは、一生懸命に聞いていても、よく分からないということが少なくありません。・・・(中略)・・・大切な部分を書いて示す、大事な事柄の語頭音や一部分を文字や記号をかいてヒントとして示すなど、視覚的な掲示の仕方を工夫しましょう。

(全国情緒障害教育研究会編、『通常の学級におけるAD/HDの指導』, 日本文化科学社, 2003年, 50頁)

子どもたちがけがの原因を考える際、まわりの環境に目が向きにくいのは、子どもたちにとってまわりの環境は当たり前存在するものであり、そこに危険やけがの原因があるとはとらえようとしないからだと考えられる。

そこで、上記の特別支援教育の考えを生かして、原因構造の視覚化を行うこととした。子どもたちにとって意識しにくいまわりの「環境」(環境因子)を、人の「行動」と分けてとらえやすくするため、まず、けがの原因を、「人の行動」と「環境」に分けて板書し、原因には両面があることをとらえられるようにした。そして、それらをペン図にまとめ、人の「行動」とまわりの「環境」がかかわった部分こそがけがの原因であることを視覚化した(原因構造の視覚化UD)。

このように、授業の内容を視覚的に板書することで、子どもたちの発言や思考の過程が消えていかず、ゆっくりと考えを進める子どもや聴覚的情報の理解を苦手とする子どもも、けがの原因には、人の行動とまわりの環境があり、その両面がかかわっていることを理解できるのではないかと考えた。

② 思考活動を繰り返す場の設定(継続的接近の原理)

けがの原因をとらえ、防止するための具体的な手だてを人の行動とまわりの環境の両面から見出していく自力解決を、子どもたちが繰り返し行えるように、単元の工夫を行った。

まず、第1時、第2時は、自分自身の経験した事例、教室内、校舎内でのけがの事例から原因をとらえ、具体的な解決策を見出させた。次に通学路、地域と思考する場面を徐々に広げていった。それによって、学んだ内容や思考の手順を新しい場面に生かすことができると考えたのである。

(4) 学習指導の実際

第1時は、これまでの子どもたち自身のけがを振り返りながら、原因や解決策を探っていった。自分たちの経験から、けがの原因を「自分のことしか考えていない行動」「まわりが見えていない」とまとめたが、その原因からは納得のいく解決策が見出せなかった。

本時は、まず、この思考活動を振り返り、納得できる解決策を見つけたいという課題意識の確認を行った。そして、子どもたちにとって身近な教室でのけがの事例(教室で鬼ごっこをしていたら、転倒し、壁に取り付けられたフックで目を負傷した設定)から、原因と解決策を探っていくこととした。これは、一つの事例に絞らなければ、場面を教室内と限定したとしても、様々な人の行動やまわりの環境が考えられるため、子どもたちの思考が拡散してしまうことが予想されたためである。

事例を提示する際には、文章だけでなくより具体的に事例を理解できるように写真も用いるようにした。写真は、事故の起こった状況を連続写真で表して、文章と合わせて補助黒板に位置付けた。これにより、どのような状況だっ



【連続写真を用いて事例を説明する】

たのにかに疑問が残ることなく、原因を探る活動にスムーズに移ることができた。

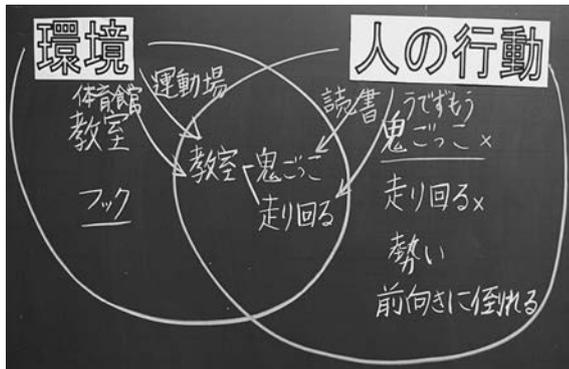
事例から、原因を見つけ出していく際には、書き出すのではなく、ワークシートの事例に直接線を引いたり○や□で囲んだりすることで、自分の考えが表せるようにした。

このようにして子どもたちが見つけ出した原因を「人の行動」と「環境」とに分けて板書し、整理していった。そして、「人の行動」は赤色、「環境」は黄色でそれぞれを囲み（**原因構造の視覚化**）、けがの原因には「人の行動」とまわりの「環境」があることを理解させ、その両面がかかわってけがが起こることを視覚的に理解させた。

けがの原因は何かと確認したときの抽出児の反応は以下の通りである。

- 高1児：環境が悪かったことと人の行動が悪かったこと。
- 高2児：走り回るといふ行動と、教室のフックという環境が重なったこと。
- 低1児：両方。環境と行動。
- 低2児：両方。鬼ごっこだけではない。教室で鬼ごっこをしていたことが原因。

この働きかけにより、低位群の子どもたちも、けがの原因には、人の行動とまわりの環境があり、その両面がかかわっていることに気付くことができ、要素を補うことができたため、後の解決策を見出していくことにつながった。



【原因構造を視覚化した板書を用いる】

事例の解決策を考えていく際、初めは、自分自身の経験から「鬼ごっこをしている人を注意すればいいと思う。」という考えが出された。

そこで、その意見を人の行動への働きかけと位置付けた。そうすることで、子どもたちは、人の行動と環境の両面から働きかけることができると気付き、人の行動と環境の両面から解決策を見出していった。また、「環境を変えられないときには、行動を変えればいい」と、人の行動と環境の相互補完関係にも気付いていった。

- C1：教室では、走り回りません。
- T：では、例えば、「環境」面から考えて、運動場が工事中で使えなかったらどうしますか。
- C2：教室で本を読んだり体育館で遊んだりします。
- C3：体育館を使えるならそこで遊びます。体育館が使えないなら、教室で静かに本を読んだりいいと思います。
- C4：教室で走らない遊びをしたらいいと思います。腕相撲とか、「行動」を考えます。

次に、校舎内の廊下での事例（廊下を歩いていたら、外開きのドアが開き、腕を負傷した設定）を提示した。子どもたちは、写真とけがの状況から、まず、外開きのドアという環境の問題をとらえた。人の行動だけに注目することなく、この廊下でのけがを防ぐためには、「ふつうに歩くだけではだめだ。」「ドアをいつも開けておいたらいい。」等と、けがを防止するための解決策を、行動と環境の両面から考えていった。

そして、前時に自分たちがまとめた原因と解決策を振り返り、改めて、行動面と環境面の両面のかかわりに着目しながら整理し、けがを防止するための方法を一人一人ワークシートにまとめた。



【予想を振り返りまとめる】

C5：まわりの環境を確認して、けがのもとになる行動をやめる。

C6：けがのもとになる行動をしないことがけがを防ぐことにつながる。一人一人がまわりを見ることが重要。

その後、第3時には下校時の通学路の事例を設定した。はじめ、交通事故は自分たちの力では防げないと考えている子どもも、前時に学んだ「人の行動」と「環境」のかかわりから原因をとらえ、その両面から解決策を考えていき、思考を進めていくことができた。

「歩道がないからしょうがない。」という意見に対して、「道路でも、人の行動と環境の両面からけがや事故を防げる。歩道がない通学路なら、自分たちの行動を考えればいい。」と、環境面に着目して行動を選択する等、行動面と環境面の両面から防止策を見出していった。

(5) 成果と課題

① 量的・質的な検証

本実践の前後で「思考力」テスト（15点満点）を行い、「思考力」の伸びを検証した。その結果、平均値で0.6点の向上がみられた。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた [$t(38)=2.81$, $P<.01$]。このことから、本実践を通し「思考力」の向上が図られたと言える。

けがの原因や解決策について、ワークシートにまとめた抽出児の反応は、以下の通りである。

高1児：原因は必ず環境と人の行動にある。だから、それを解決するためには、原因の環境と人の行動から考えるとよい。

高2児：環境や人の行動、この2つが重なってけがというものが起こるということが分かった。原因はぼくたちにもあるが、環境にもあるということが分かった。いろいろなことに注意しておけば、けがはしないということが分かった。

低1児：自分のこと以外の人のことを考えて、まわりをよく見るとけがをしなくなる。

低2児：環境のことに気を配り、気を付けたらけがをしにくい。

高1児、高2児ともに、けがの原因を人の行動とまわりの環境の両面からとらえ、解決策を考えている。低1児、低2児も人の行動とまわりの環境の両面に着目し、解決策を考えられている。

② 考察

上記、量的・質的検証の結果から、ねらいとした「思考力」の向上が図られたと言えるだろう。原因構造を板書上に整理していったことで、子どもたちの思考が整理されていったのではないかと考える。その点で、けがの原因を、「人の行動」と「環境」に分けて板書し、原因には両面があることをとらえられるようにした原因構造の視覚化は一定の効果があったと言えるだろう。

しかし、ワークシートからは、けがの原因に「環境」がかかわっていることは理解できていることが読み取れるものの、解決策では「自分の行動に気を付けたらけがはしない」と、授業後も行動面からの解決にこだわっている子どもがいた。子どもたちの意識が「人の行動」に向きやすいことを踏まえ、「環境」に潜む原因に特化した事例を取り上げる等、子どもたちの意識を「環境」に向けるさらなる手だてが必要であったと言える。

また、子どもたちが、けがの防止を自分のこととして考えるためには、事例の解決だけでなく、人の行動と環境の両面から見て、自分の生活を振り返る等、自分のこととして考える場面が必要であったと考える。